明治維新150周年カウントダウン企画

薩摩藩英國留學生同行記

Record of Satsuma Students Travel Companions

ロンドンでの生活はじまる

参考資料／薩藩海軍史,薩摩藩英国留学生

画／竹添 星児　本文監修／東川 隆太郎

第3回 全6回

今年四月に羽島を出港した薩摩藩英国留学生一行が、ついに英国へ到着した。一行はロンドンで生活を始め、それぞれの学業にとりかかっているようだ。

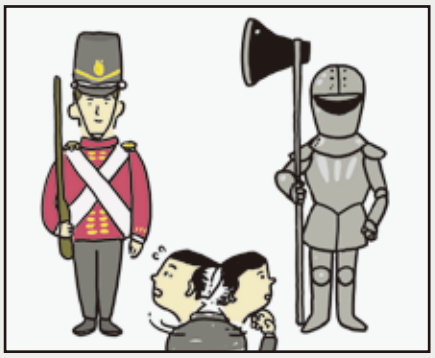
英国到着 富国強兵の志新たに

留学生の一行が同国サザンプトン港に到着したのは、慶応元(一八六五)年六月二十一日のことである。英国の地を踏んだ留学生らの心は、無事に長旅を終えた喜びと今後の学業への強い期待に満ちていた。留学生の中には西洋文明に否定的な者もいたが、今や彼らも富国強兵の必要性を十分に感じているようだ。

このような心境に至ったきっかけは英国到着前に寄港したマルタ島にある。英国海軍の重要拠点であるマルタ島で、留学生らは最新鋭の設備とともに中世時代の武具などを見学した。昔は日本人と同じく長槍長刀を使用していた西洋人が、今や大砲や艦隊を操るほどの技術を有しているという事実は、留学生らに大きな衝撃を与えたのである。視察員として同行する五代友厚は、この時の彼らの様子を次のように書き記している。

「地中海『マルタ』島港に著、始て欧羅巴の開成張大なるを実験して忽ち蒙昧を照し、是迄主張せし愚論を恥ち慨嘆して止ます」

攘夷論者を西洋文明に触れさせることで富国強兵論に転向させるという、出発前の五代の思惑は、ここで見事に達成される形となった。



マルタ島で西洋諸国の飛躍的な発展を目の当たりにし、富国強兵の重要さを認識した。

ロンドンでの生活 長州留学生との出会い

ロンドンに到着した一行は、長崎の貿易商トーマス・グラヴァーの兄ジェイムズ・グラヴァーに迎えられ、住居などの世話を受けた。またちょうど大学が夏季休暇中であったため、彼らのはからいでしばらくは家庭教師を招いて英語の習得に努めることとなった。

森 有礼（もり ありのり）

〈弘化4(1847)年 – 明治22(1889)年〉

薩摩藩英国留学生として英米留学の後、一橋大学の前身となる商法講習所を開設する。明治政府で初代文部大臣を務めた他、明六社会長、東京学士会院初代会員を務める。

写真：鹿児島県立図書館 蔵

村橋 久成（むらはし ひさなり）

〈天保13(1842)年 – 明治25(1892)年〉

薩摩藩英国留学生としてロンドン大学で海軍などを学び、翌年帰国。帰国して戊辰戦争に従軍する。維新後は北海道開拓使に勤め、サッポロビールの前身となる開拓使麦酒醸造所の設立に携わった。

写真：鹿児島県立図書館 蔵

町田 申四郎（まちだ しんしろう）

〈弘化4(1847)年 – 没年不詳〉

薩摩藩英国留学生としてロンドン大学で機械学を学び、翌年帰国。帰国後は薩摩藩家老・小松帯刀の養子・小松右近となり小松家を継ぐ。その後、小松帯刀の長男・清直に家督を譲った。

写真：鹿児島県立図書館 蔵

新しい生活にも徐々に慣れるなかで、驚くべき出会いもあった。七月二日、長州藩から渡英していた三人の留学生が宿舎を訪ねてきたのである。遠い異国で日本人と出会うことなど思いもよらなかった留学生らはおおいに驚き、懐かしさをおぼえたようだ。

長州と薩摩は元治元(一八六四)年の「禁門の変」での武力衝突などもあり、両藩には深い溝がある。しかしこの長州藩士らに対立の気配はないようで、薩摩藩留学生の森有礼(もり ありのり)も「三人とも薩摩藩に心を傾けている様子が伺える。そのうち日本も西洋諸国のような世情になるだろうから、互いに心得ておくべきだろう」という主旨の感想を記している。

本国よりもいち早く、遠い英国で薩長の交流が図られたことは大変興味深い。やはり広い世界に触れることが、藩の垣根を超える良いきっかけになっているのだろう。その後もともに市内見物に向かうなど、良い関係が続いている。

一行は英会話を学ぶかたわら、造船所や鉄工所などを見学してこの夏を過ごした。その様子は現地紙「タイムズ」にも取り上げられ、東洋の島国からはるばるやってきたこの一行は西洋文化に高い関心を払い、また素早い理解力を持っていたと英国国民に伝えている。

八月には最年少の長沢鼎(ながさわ かなえ)(旧名・磯永彦輔(いそなが ひこすけ))が勉強のためスコットランドへひとり旅立ち、他の留学生らも専門の学業のため、分かれて大学教官の家へ寄宿することとなった。彼らはロンドン大学ユニバーシティ・カレッジに入学し、築城や造船、機械学などそれぞれに課せられた学問を修める予定である。

※本紙は薩摩藩英国留学生の当時の様子を紹介する企画です。本文中の時間は新暦とします。

ロンドンで出会った薩摩と長州の留学生は、藩のしがらみを超えて交流を深めた。

次回

欧州視察、商社設立の目論見